

# 板締め染色を用いた浴衣の制作

解野研究室 A18AB088 柘植愛海

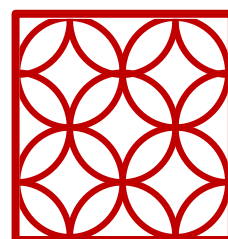
## 目的

- 伝統的な染色方法である板締め染色について学び、実際に染色・制作を行うことで板締め染色および日本の伝統的な染色方法についての理解を深める。
- 板締め染色が現在は廃れてしまった原因やその改善方法について経験をもとに考察する。

## 板締め染色とは

- 畳んだ布を版木で強く挟み込んだ状態で染色することで、版木以外の部分が染められ、柄を表現することができる染色方法。
- 日本では7世紀頃から行われており、夾纈とも呼ばれる。

## デザイン



: 七宝柄

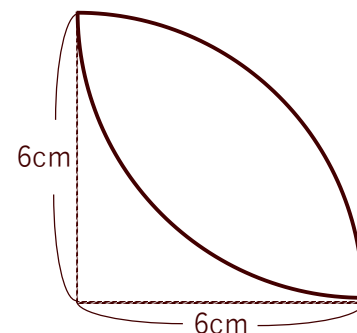
- 七宝とは仏教の教典に出てくる七種の宝のことである。
- 柄においては円形が永遠に連鎖していることから円満、調和、ご縁などの意味が込められている。

## 染色に使用したもの

染料：ネオスレンレッド C-F3B

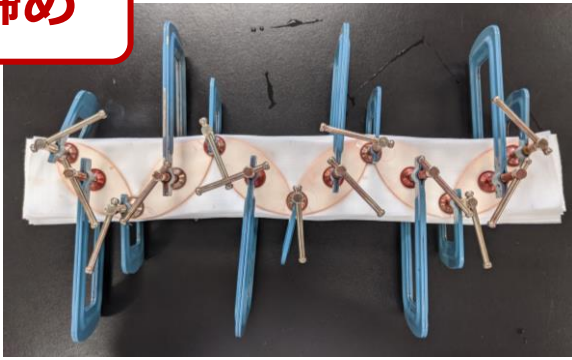
生地：綿ゆかた地 乱紅梅Ⅲ（約39cm巾）

版木：右図に切り出した低発泡塩ビ板（3mm）12枚



# 染色方法

## ①板締め

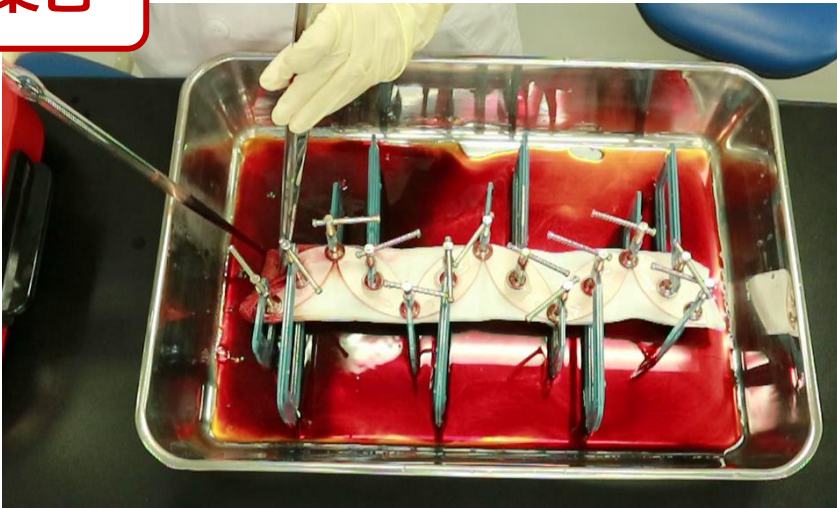


## ②染液の調製

- ・ 染料
- ・ 5%水酸化NaOH水溶液
- ・ ハイドロサルファイトナトリウム
- ・ スレン均染剤



## ④染色



## ③水に浸す



## ⑦完成



## ⑥アイロンがけ・縫製

## ⑤空気酸化・洗浄・乾燥



## まとめ

- ・ 板締め染色をするためには、版木を作らなくてはならない、布を丁寧に折り、板締めするなど工程が多い。時間と手間がとてもかかった。また、染色方法にもさらなる工夫や技術が必要。
- ・ 自分で経験したからこそ昔の人々の染色技術の高さに改めて驚いた。
- ・ 現代においては、板締め染色はあまりにも手間と時間がかかってしまうので、他の染色方法に移り変わってしまうのは仕方ないことだと感じた。
- ・ しかし、板締め染色は大変ではあるが、柄のにじみなど、手仕事でしか表現できない部分もあるので、これらを活かしたデザインを考えれば板締め染色を活用できる道もあるのではないかと思った。